

# シンポジウム「新しい人文学の地平を求めて —ヨーロッパの学知と東アジアの人文学—」趣旨説明

甚野尚志

## The Purport of the Conference

Takashi JINNO

### はじめに

「近代日本の人文学と東アジア文化圏—東アジアにおける人文学の危機と再生」のプロジェクトの全体の趣旨は、シンポジウムの趣旨文にもあるように「近代日本が先導してきた東アジアの人文学を検証し、国民国家を基盤にした人文学からグローバル化時代が要請する新たな人文学への転換を東アジア規模で模索すること」にある。今回、本プロジェクトのキックオフ・シンポジウムとして、「グループ1」（研究テーマ「近代日本と東アジアに成立した人文学の検証」）<sup>(1)</sup>が中心になり、「新しい人文学の地平を求めて—ヨーロッパの学知と東アジアの人文学—」というシンポジウムを企画した。タイトルからもわかるように、今回のシンポジウムは、ヨーロッパの学知と人文学の伝統を考えながら、その上で、それが東アジアの近代人文学の形成にいかなる影響を与えたかを問うシンポジウムになる。また本シンポジウムを企画した経緯をいえば、そのきっかけは、第一報告者の安酸敏真先生が上梓された人文学に関する書物に触発されてのことである<sup>(2)</sup>。この企画を作る過程で、研究分担者の根占猷一先生にご相談し、他の報告者の逸見龍生先生、武藤秀太郎先生をご紹介いただいた。関係する方々にここで謝意を表したい。

### 1. 歴史学にみる人文学の変貌—「社会史」から「言語論的転回へ」

ところで、私が大学生から大学院生の頃、つまり

1970年代後半から80年代前半の時期は、日本では歴史研究で社会史ブームが起こった時代である。この背景には、何より大学紛争後の70年代に生じた既存のアカデミズムへの批判があった。1968年に世界中で始まった大学紛争は大学のアカデミズムの制度を根本から批判したが、その結果、人文学では19世紀以降に欧米の世界で発展してきた近代的な学知が批判された。それは哲学ではポストモダニズムの思想潮流を生み、ミシェル・フーコー、ジャック・デリダらのフランスの思想が日本でも紹介され、近代的な学知の批判が日本の人文学でも強く意識されるようになる。ポストモダニズムの思想は同時に、それまで人文学の考察対象とされなかった分野を学問の対象にする潮流も生んだ。すなわち70年代からは大衆文化も学問的な対象とされ、サブカルチャー論が盛んになる。そしてこのような動向は歴史学にも影響を及ぼし、伝統的な政治史や社会経済史がカバーしきれなかった人間生活の様々な側面や社会の周縁的な存在をクローズアップする社会史が注目されるようになった。社会史は最初ヨーロッパの歴史学で起こった潮流であり、フランスのアナール派などの研究が次々と新しい歴史学の領域を開拓し、それらは翻訳を通じ日本の歴史学にも影響を及ぼした。

さらに80年代以降の歴史学のパラダイム転換として重要な現象はいわゆる「言語論的転回」がある。「言語論的転回」とは、そもそも文学や哲学の領域から始まった動きだが、やや単純化していえば、書かれたテキストをその書かれた内容の背後にある作者の無意識の思考などから分析していく方

法である。歴史学では、史料そのものをそこに事実が素朴に表現されていくテキストとして読むのではなく、あくまでもその史料を一つのテキストとして、その背後にある意図や論理に注目しつつ事実とは切り離されたテキストとして読み、その上で事実が何かを批判的に推定していく史料批判の方法を生んだ（西洋史の分野では「史料の動態論的研究」などと称される）。「言語論的転回」以降、人文学はますます定義が不明瞭になり、たんなる言説の空間にただよう実体のない学問ではないかという議論も起こった。歴史学では、カルロ・ギンズブルクのヘイデン・ホワイト<sup>(3)</sup>への批判は今でも記憶に新しい。表象の歴史学と歴史学の倫理性との間にはいまだに解決できない問題がある<sup>(4)</sup>。

## 2. 人文学の危機と歴史学—「ヨーロッパ中心史観」から「グローバル・ヒストリー」へ

最近になり、「人文学の危機」と呼ぶのかのように、再び歴史学研究でも大きな歴史認識の枠組みを問う議論が生じている。その背景には、世界で同時並行的に生じているグローバル化という事態があるのはいうまでもない。現在、歴史学のみならず人文学の枠組みの組み直しが求められている背景には、グローバル化により世界的規模での人類の共生が重要な課題となっているという現実がある。現代世界では、ことなる民族やことなる宗教の間での対話や共存がますます求められており、そうした現状に適合した新しい人文学が必要とされている。たとえば歴史学では、これまでの「ヨーロッパ中心史観」の世界史ではない人類が共有できる世界史を描くことが要請されている。現在、日本で書かれる世界史の書物では、意識的にヨーロッパ中心ではない視点から叙述するものが多くなった。昨今の歴史学では、西洋史と東洋史との地理区分に対する見直しが進み、ユーラシア大陸の相互交流のなかから世界史を諸文明圏の交流として描こうとする試みもなされている。とくにモンゴル帝国やイスラーム諸国などこれまでは東洋史に分類されていた地域の歴史をヨーロッパ史との関係の中で捉え直そうとする研究も目立つようになった<sup>(5)</sup>。現在このような状況のなか、世界史の教科書の新たな書き換えの提言もなされている。それはたとえば、羽田正氏が提唱した「世界市民」のための新しい世界史という議論で多

くの研究者が知る所になっている<sup>(6)</sup>。

私自身が新しい「グローバル・ヒストリー」の試みとして、最近とくに注目するのは、近世キリスト教の東アジア布教の研究である。東アジアは16世紀半ばから17世紀半ばにスペイン・ポルトガルからの影響（イベリア・インパクト）のもとでヨーロッパの文明と接触し近代への道を歩むことになったが、キリシタンや南蛮文化の時代に東アジアがどのように西欧のキリスト教や人文学を受け入れたのかについては、いまだ十分に解明されていない問題が多くある。我々の「グループ1」では内外の研究者を招聘して、こうしたヨーロッパと東アジアの文化の接続の問題を解明したいと考えている<sup>(7)</sup>。

## 3. 日本と東アジアにおける人文学の形成とそのイデオロギー性

現在、日本と東アジアでこれまで通用してきた人文学が危機にあり、新たな人文学の創出、あるいは既存の人文学の組み直しが求められるとすれば、そのためにも、日本がヨーロッパ文明と遭遇して以来、どのように人文学の学問が形成されたのかを問い、同時に、近代日本の人文学が形成された際の背景やそのイデオロギー性も検討する必要がある。また、日本で構築された人文学が韓国や中国の近代的人文学の形成にいかなる影響を与えたのかも考える必要がある。我々の「グループ1」では、そうした問題意識に立ち、研究テーマとして、「日本と東アジアにおける近代歴史学の形成とそのイデオロギー性」と「日本と東アジアにおける「文学」概念の成立と西洋文学受容の問題点」を掲げている。

近代歴史学の形成過程に関して、我々が考察したい問題点は以下3点ある。(1)ヨーロッパの歴史学が日本でどのように受容され、それがいかにヨーロッパ中心主義的な世界史認識の形成に寄与したか、またそのような日本の近代歴史学が韓国、中国にどのような影響を与えたか。(2)日本の近代歴史学は、東アジア史を中国史としてではなく東洋史の一部として考察する歴史認識を生んだ。東洋史学がいかにして誕生し、それとともに成立した国史、東洋史、西洋史という世界史区分はどのようなイデオロギー性を持っていたのか<sup>(8)</sup>。(3)戦後歴史学が前提としてきた東洋と西洋の地域区分、古代、中世、近代の時代区分、一国史観を再検討し、ユーラシア

世界についても新しい歴史像を提言する必要がある。

「文学」概念の成立に関しては次の問題が考えられる。(1) 東アジアの伝統的な「文」の概念がどのように近代以降隠蔽されたのか、また東アジアで「文」の概念がいかなる文化的意味を保持していたのか。(2) 日本での西洋文学受容とその人文学への影響、日本における西洋的「文学」概念の成立がいかなるものだったのか。

## 終わりに

### ー「スキエンティア」と「フマニタス」研究

人文学のあり方を考える際に、変わらない普遍的な問いがある。それは、安酸先生が指摘する「スキエンティア」と「フマニタス研究」の関係の問題であろう。我々の人文学が影響を受けた西洋の人文学の伝統は、もとをただせば古代ギリシャ・ローマの自由学芸まで行き着く。古代の自由学芸がスキルとしての学知ではなく人間が自由人であるために身につける教養だったことはいまさらいうまでもない。自由学芸の伝統は中世ヨーロッパでも受け継がれたが、専門知としての「スキエンティア」が発達すると、学知は人間性の完成を目指す「フマニタス研究」の理想と乖離するようになる。

ルネサンスの「フマニタス研究」が中世とはことなる、新たな神と人間との関係を構築する試みを創造し、宗教改革を生んだように、ヨーロッパの学知の伝統ではつねに硬直した「スキエンティア」を破壊する「フマニタス研究」への回帰がある。「フマニタス研究」は、学知を組み直す全体的な視点を提供し、学知を人間の生に根差した関心から問い直す試みともいえる。その視点は、安酸先生が報告の結論として述べる、ベークのいう「認識されたものの認識」の定式であり、あるいはカッシーラーのいう「シンボルを操るもの」としての人間把握の理解でもあろう。新しい人文学を考えるにあたり、こうした「フマニタス研究」の視点がいま再び必要なのではないだろうか。

## 注

- (1)「グループ1」は、サブ・グループとして次の3つの研究班に分かれている。A班「ヨーロッパの学知が近代日本と東アジアの人文学の形成に与えた影響」、B班「日本と東アジアにおける近代歴史学の形成とそのイデオロギー性」、C班「日本と東アジアにおける「文学」概念の成立と西洋文学受容の問題点」。
- A班は「西欧文明の東アジア世界への接続」を共通テーマに掲げ、歴史学、文学などの様々な分野の報告を行い、学際的な共同研究を遂行する。B班は「ユーラシア歴史世界の再構成」を共通テーマに掲げ、歴史学とくに西洋史と東洋史の分野の研究者が報告を行う。A班とB班の研究会は、早稲田大学総合研究機構のプロジェクト研究所「ヨーロッパ中世・ルネサンス研究所」(所長、甚野尚志)の活動および科研・基盤(A)「中近世キリスト教世界の多元性とグローバル・ヒストリーへの視角」(代表、甚野尚志)の活動と連携し研究を行う。C班は「東アジア世界における「文」の伝統と変容」を研究会のテーマに掲げ、日本文学および外国文学の研究者が主体となり報告を行う。C班の研究会は、早稲田大学総合研究機構のプロジェクト研究所「日本古典籍研究所」(所長、河野貴美子)の活動と連携して研究を遂行する。また3つの班の合同での研究会も定期的に開催する予定である。
- (2) 安酸敏眞『人文学概論ー新しい人文学の地平を求めて』(知泉書館、2014年)
- (3) ヘイデン・ホワイトの著『メタヒストリー』(Hayden White, *Metahistory, The Historical Imagination in Nineteenth-Century Europe*, 1973)は、歴史叙述の「言語論的転回」による分析の古典的書物であるが未邦訳。カルロ・ギンズブルク(上村忠男ほか訳)『裁判官と歴史家』(平凡社、1992年)は、歴史学の倫理性を考える意味で示唆するところが多い。
- (4) 表象の歴史学の限界と歴史学の本質の問いについては、遅塚忠躬『史学概論』(東大出版会、2010年)がきわめて誠実に議論している。この著書の冒頭で、遅塚氏は「歴史学は、すでにできあがった知の体系ではなく、躍動し変貌し続ける生き物である。それは、新たな領域を開拓し、従来とは違った観点から対象を見なおし、また、新たな方法を編み出したり隣接諸科学から借用したりしながら、日々その相貌を変えつつある」と述べているが、「すでにできあがった知の体系ではなく、躍動し変貌し続ける生き物」という比喩は、歴史学だけでなく人文学の本質を言い当てている。
- (5) 水島司編『グローバル・ヒストリーの挑戦』(山川出版社、2008年)が、我が国の最近の「グローバル・ヒストリー」研究の動向を手際よく俯瞰している。
- (6) 羽田正『新しい世界史へ』(岩波新書、2011年)。羽田氏のこの書物は「ヨーロッパ中心主義」を図式化、単純化

している点で問題があるが、日本の世界史教科書のバイアスを指摘する点では共感できる。

- (7) このような企画の一つとして、2015年3月4日に、「近世のキリスト教布教と東アジア」というシンポジウムを早稲田大学戸山キャンパスで開催する予定である。コーディネーター：甚野尚志、基調報告：Chen Hui-Hung（台湾、台湾大学）、Bee Yun（韓国、成均館大学）、日本側報告者：伊川健二、児嶋由枝、清水有子、牧野元紀、コメントレーター：平山篤子、根占献一。
- (8) この問題を考えるためには、今回の報告者の一人の武藤秀太郎氏の業績（「朝河貫一と胡適」『アジア研究』（59巻3・4号、2013年）、『近代日本の社会科学と東アジア』藤原書店、2009年）が示唆するところが多い。近代日本の世界史認識とそのイデオロギー性を考える上で、東洋史学の成立過程の分析は重要なテーマとなろう。その問題の背景には、エドワード・サイード『オリエンタリズム』（今沢紀子訳、平凡社、1993年）が指摘するように、18-19世紀にかけてのヨーロッパの帝国主義的な膨張がアジア、アフリカ地域への「オリエンタリズム」観念を生んだことがある。「文明化した西洋」対「停滞した東洋」の図式は、19世紀のヨーロッパの歴史家の意識にもあり、彼らにとり歴史とはヨーロッパ文明の発展の歴史にほかならない。近代日本の知識人はヨーロッパの進歩史観とともに、ヨーロッパの知識人の「オリエンタリズム」観念も受け入れ、東アジア認識に適用した。そこから日本の知識人の「脱亜論」や「中国停滞論」が生まれ、歴史学では伝統的な中国史に代わり「東洋史」の学問が誕生するといえる。